

接触場面「ワークショップ」*

中 川 慎 二

1 はじめに —接触場面「ワークショップ」の目的

この「ワークショップ」は、「体験学習」を目的として設定したものではなく、一義的には日本人ドイツ語学習者を対象にした、「初対面の非母語話者との接触場面での言語行動に関する研究データの収集」が目的である。関西学院大学言語教育研究センターで開講しているドイツ語インテンシヴコースの受講者がその対象である。他方、このワークショップでは、いわば副産物¹⁾として教育上の効果も意図した。それは、純粋な仮説検証のための心理学実験ではないために可能なことである。このワークショップを体験することで、

1. ドイツ語学習の動機付けを高めること、
2. 学習者が自分のコミュニケーション行動²⁾を反省的に自己分析する能力を高め

* 実験的観察法で接触場面研究のためにデータ収集を行った。被験者には「ワークショップ」という設定で参加を募った。実験的観察法とここで言っているのは、心理学実験のような仮説検証のための実験ではなく、実験的に設定された接触場面で観察のためのデータ収集を行ったということである。観察は、エスノメトロロジーに近い方法で行い、言語データは会話分析の対象とした。

- 1) ワークショップ後に行ったアンケート、学習者に対するインタビューからも、この副次的な目的が十分果たされたことが確認された。
- 2) コミュニケーション行動は、話者と話し相手との相互作用によって促進される。言語学習においては、コミュニケーション能力は、教室場面や教室外で現実になされる相互作用を通して習得されると考える。

Van Lier, Leo 1996 *Interaction in the language curriculum: awareness, autonomy, and authenticity*. London Longman.

Edmondson, Willis J. (1995) „Interaktion zwischen Fremdsprachenlehrer und -lerner.“ In:

ること、

3. 自律学習の能力を高めるとともに、自分の持っている学習ストラテジーの発見を意識させること、

4. また異文化接触に対して感受性を高めること

の4つが教育上の効果として期待されることである。

2 実験的観察法による事例研究 —データ収集に関して

実験の前提として学習者に伝えたことは、「授業の時間外にワークショップを行います。ワークショップでの課題は、シナリオをドイツ語ネイティブスピーカーと読んでいただき、その場面をスタジオで収録し、その映像と音声を収録後に見て、発音などのアドバイスをを行います。」というものであった。事後的にワークショップという実験的環境であることを説明した。ワークショップは、それぞれの参加者の時間割の中で空き時間を使って行われた。つまり、授業時間外に自由に参加してもらったのである。

- ・実験場所：関西学院大学総合教育研究室（第4別館4階 録画用スタジオ）
- ・実験日時：1999年12月3日（金）、8日（水）、10日（金）インテンシヴコースの授業終了後、15：30以降
- ・実験スタッフ：実験者（筆者）、ドイツ語母語話者（被験者と面識のないドイツ語母語話者で、英語は流暢に使える。また、日本滞在は3年、初級程度の日本語能力がある。ただし、ワークショップの趣旨を説明し、可能な限りドイツ語のみで対応してもらった。）、被験者（合計10名、事後的に研究目的で映像と音声を利用することに承諾してもらっている。）、撮影スタッフ（録音補助1名、撮影補助3名）

- ・使用機器：音声は SONY の DAT を使用。被験者の声は右、ドイツ語母語話者の声は左からステレオ録音し、個別にも、同時に聞けるように録音した。マイクにはピンマイクを使用しマイクが気にならないよう配慮した。映像はビデオカメラを4台使用。1番カメラは被験者（左側から）、2番カメラはドイツ語母語話者、第3カメラは側面から被験者とドイツ語母語話者の2人、第4カメラは予備に被験者を右側よりから撮影した。
- ・被験者：関西学院大学言語教育研究センターで1999年からドイツ語インテンシヴコースを受講している学生。1999年4月入学で、1学期間は各学部で開講しているレギュラーコース（文法翻訳方法）でドイツ語を日本人教員のもとで学習した。2学期目の1999年度秋学期に、本人の希望により言語教育研究センターで開講しているドイツ語インテンシヴコースに変更し、週3回（うち、週1回は日本人、週2回はドイツ語母語話者）の授業を8週間から9週間受講したところ。ただし、社会学部、文学部の学生はインテンシヴ以外にさらに週2回学部でのドイツ語の授業も受けている。

(表1)

実験日	Nr.	学部	性別	年齢	外国滞在	外国人との接触
2000/12/3	1	法学部	男	19	ない	ない
2000/12/3	2	社会学部	女	19	ある	ある
2000/12/3	3	法学部	女	19	ない	ない
2000/12/8	4	文学部	男	20	ない	すくない
2000/12/8	5	経済学部	女	19	ない	ない
2000/12/8	6	法学部	女	19	ない	ない
2000/12/8	7	神学部	女	35	ある	すくない
2000/12/10	8	文学部	女	20	ない	ない
2000/12/10	9	文学部	女	19	ない	ない
2000/12/10	10	経済学部	男	20	ある	すくない

・実験の手順：

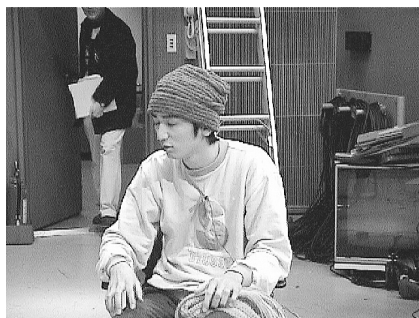
1. 言語教育研究センター2階ホールに約束した時間に来てもらった。そこでスタジオの環境、撮影スタッフ、「ドイツ人と<シナリオ>を朗読してもらい、

その場면을撮影しドイツ語学習のアドバイスを」という今日の課題について改めて日本語で説明する。従って、2以下の作業はむしろ自然に思われる準備となっている。

2. ピンマイクを胸元につけさせ、ミキサーと録音のチェックをする。
3. ドイツ人母語話者の向かいに位置する椅子を示して着席させる。その直後に、実験者は「シナリオを忘れてきた」という設定でスタジオを出ていく。被験者はドイツ語母語話者とスタジオに取り残される。
4. 実験者はスタジオ階上にある調整室でモニターと連絡用マイクを通してスタジオの中を観察し、話



写真① 実験の手順3の様子



写真② 実験者がスタジオに戻る

- しが途切れても最低5分、長くても15分くらい経過したところでスタジオに戻る。
5. スタジオに戻ると、まず種明かしをする。「待っていた」場面が録画されていたことを知らせ、さらに「シナリオ」はどこにも存在しないことを説明する。
6. 被験者にはまず最初に感想を聞き、今の気分を尋ねる。それから、アンケート用紙の質問事項に答えさせながら、自分のコミュニケーション行動について記録させる。これは、自分のコミュニケーション行動を反省的に自己分析させるためである。
7. 日本語でフォローアップ・インタビューを行う。実験者との対話の中で、自

分の経験、自分のコミュニケーション行動を言語化させる。

8. インタビュー終了後は、被験者に伴って総合教育研究室の出口まで行き、被験者が自分のコミュニケーション能力を過度に否定的に評価することがないように、必要と思われる場合にはケアをおこなう。
 9. 個々の被験者には、このワークショップが終了するまで、ワークショップについては口外しないように依頼する。
 10. 3回のワークショップが終了した後の授業では、学習者のコミュニケーション能力について講評し、被験者から出された、コミュニケーション・ストラテジーを紹介し、懇談した。
- ・実験の問題点：信頼できるデータを得るためだけでなく、アクションリサーチの枠組みの中で、実験的観察法を用いたために、以下の可能な問題点について事前に考慮した。
- 1 被験者が実験中の自分のコミュニケーション行動を否定的にのみ評価することになると、被験者は容易に心的に傷つけられる。
 - 2 実験者である教員と被験者である学生との間の信頼関係は容易に傷つけられる。
 - 3 被験者は、フォローアップインタビューでは、自分自身のコミュニケーション行動を、実験者との対話の中で構成的に自己分析する。ただし、そのために、用意された質問項目との関連で方向付けられやすい。

3 データ分析

3-1 言語データの分析

DATと4台のビデオカメラで収録された「ワークショップ」の言語的情報は、Hiat-DOSで記述することを当初は試みたが、この研究ではExcelを主に使用した。Hiat-DOSは時間的関係を記述された文字との関係で記述しやすいが、その他の情報を追加したり、分析する際のツールにはExcelも有効であると考えられる

ため。ただし、同時発話の研究には向いていない。その他には、話者交代、発言権、休止、言語的拘束性などの記述・分析にも Excel は向いている。

以下に示すのは、被験者 2 の実験で、最初の約 2 分間の言語データである。

ZL (Zeile) : 行、EH (Einheit) : 発話単位、ZE (Zeit) : 時間、SP (Sprecher) : 話者、
C1 (コード 1)、C2 (コード 2)、Aussage : 発話内容

ZL	EH	ZE	SP	C1	C2	Aussage
1	0	0:00	F	AS		ちょっとシナリオ忘れてきたんでシナリオ取ってくるんでちょっとそこでしゃべっててください。
2	0	0:03	J2	AW		はい
3	1	0:04	J2	AS		Guten Tag
4	1	0:04	D	AW		Guten Tag
5	2	0:19	D	AS	IV	Sie lernen hier Deutsch? Im Intensivkurs?
6	2	0:20	J2	AW	IG	Ja, I'm first time er
7	2	0:28	D	AS	BE	erste?
8	2	0:29	J2	AW		Ja ja hm
9	2	0:31	D	AS	IF	das erste Jahr?
10	2	0:32	D	AW	IB	Ja
11	3	0:35	D	AS	IF	Seit (), seit Oktober? Oktober?
12	3	0:41	J2	W	IF	Ok, Oktober?
13	3	0:42	D	W		Der Beginn war im Oktober von dem Kurs?
14	3	0:46	J2	AW	IB	Oh, ja ja ja.
15	4	0:50	D	AS		Aha, und ist es interessant?
16	4	0:52	J2	AW	SIA	Ja [lächelnd], uhm aber ahm difficult なんて [ganz leise]
17	4	1:05	D	AS	IF	hard, schwierig?
18	4	1:07	J2	AW		あ、hm、えっ、hm[lächelnd] うーんと
19	4	1:17	D	AS	IF	Deutsch ist schwer?
20	4	0:19	J2	AW	SIA	あの interessant[undeutlich], inte...
21	4	1:22	D	AS	W	Intensivkurs der Intensivkurs ist schwer?
22	4	1:26	J2	AW	IB	あ、あの、ja. A little.
23	4	1:29	D	W		Man muß viel, viel lernen, viel studieren?
24	4	1:35	J2	AW		え、え
25	4	1:36	D	W		Viel Deutsch lernen?
26	4	1:39	J2	AW	IB	Ja.
27	4	1:40	D			Hm
28	4	1:41	J2	AW	SIA	uhm aber in in interessant
29	4	1:45	D		W	Interessant!
30	4	1:46	J2		IB	Ah ja.
31	5	1:50	D	AS	IV	Wer sind Ihre Lehrer, Ihre Professoren? Bei wem lernen Sie? Herr Nakagawa
32	5	1:58	J2	AW	IB	Ja
33	5	1:59	D	AS	IV	Und

34	5	2:01	J2	AW	IG	Nakagawa, Ost, Ostheider, Herr Ostheider, Frau Ohsaki
35	5	2:07	D		IF	Ah ja.
36	5	2:07	J2		IB	Ja.
37	6	2:11	D	AS	IV	Und wie viele Stunden in einer Woche (?) haben Sie?
38	6	2:19	J2	W		Ah, ah wie?
39	6	2:22	D	W	IV	Hm, hm wie viele Stunden zwei Stunden, drei Stunden
40	6	2:27	J2	AS	IF	Aaa, hmmm, im Club
41	6	2:30	D	W	IV	Wie viele ja wie viel wie viele Klassen in einer Woche? Montag, Dienstag, Mittwoch, Donnerstag, Freitag in einer Woche? Wie viele?
42	6	2:39	J2	AW	IG	Ah, drei.
43	6	2:40	D	W	IF	Drei Stunden
44	6	2:40	J2	AW	SIA	Ja, (?) ah so. Montag, Mittwoch, Freitag. (?) Aber ich habe (?) auch (?) auch Klass Deutsch. So ich lerne, lerne 5.
45	6	3:17	D		IF	Oh,
46	6	3:20	J2		IB	Ja
47	6	3:22	D	AS	IF	So, also, Sie haben normale Klasse und plus Intensivkurs. Oh.
48	6	3:24	J2	AW	IB	Ja, ja
49	6	3:26	D		IF	So
50	6	3:27	J2	W	IB	So [lacht]
51	6	3:29	D	AS	IF	Viel Arbeit.
52	6	3:30	J2	AW	IB	Ja

C1: コード 1

C2: コード 2

AS: ansprechen (話しかけ)	IV: Information verlangen (情報請求)
AW: antworten (返事)	IG: Information geben (情報提供)
W: Wiederholung (繰り返し、問い返し)	SIA: selber Information anbieten (自発的情報提供)
	IF: Information feststellen (情報確認)
	IB: Information bestätigen (情報確定)

この対話場面は、被験者2がドイツ語母語話者と対面してすぐに始めた対話の冒頭である。被験者2とのペアでは、実験者がスタジオを退出すると同時に対話が始まっている。この対話の最初から約3分半では、3行目(Z.3)以外では、常にドイツ語母語話者が話しかけている。つまり、優先的に発言権を取ったり、話題を制御する権限を行使している。ところが、3行目では被験者2である日本人ドイツ語学習者が話しかけている。それはなぜか。それは、そこで使用されているのが“Guten Tag.”という簡単な挨拶の表現であるためではなく、発話単位0に原因があると思われる。実験者が始めている発話単位0では、「ちょっとシナリオ忘れてきたん

でシナリオ取ってくるんでちょっとそこでしゃべっててください。」と、「シナリオを読む」というこの状況に変化が生じたことを伝え、さらに「(すぐにシナリオと一緒に読むことになるドイツ語話者と) ちょっとじゃべっている」ことを指示されている。つまり、そのことで発言権をとるのに自然な順位に置かれたという事である。そのために、“Guten Tag.”と発話することを日本人被験者に可能にしていると考えられる。もしそのような指示がない場合は、この被験者2の場合であれば“Guten Tag.”と自ら話しかけることはなかった可能性が高いと考えられる。この対話の最初から約3分半では、情報請求は一回のみ生じており、その質問が質問内容を特定した決定疑問文で継続され(11、13行目)、また表現を変えて繰り返されている。被験者からの自発的な情報提供が3回見られる。一回目の情報提供では、「ドイツ語がむづかしい」ということを伝えようとしている。英語の difficult は使えたが、話し相手であるドイツ語母語話者から“Hard, schwierig?” “Deutsch ist schwer?” という表現でなされた情報確認は成立していない。20行目では自発的な情報提供が interessant という語彙でなされているが、この語彙はドイツ語母語話者には部分的にしか届かず、inte- までが伝わり、学習者によって本来意図された interessant という語彙は、Intensivkurs という単語に置き換えられてしまっているが、28行目にみられるように再度なされた自発的な情報提供により、interessant という新たな情報が話し相手に伝わることとなった。ドイツ語母語話者に発言権をほとんど取られているが、被験者2が自発的に情報提供する姿勢で対話が継続したと考えられる。結局、被験者2の場合には後半部分で発言権をとることに成功し始め、11分間対話が途切れることなく続いている。

3-2 非言語データの分析

従来の研究では文字情報が中心であるが、今回の実験後の分析では、非言語情報をビデオテープからおこした静止画をPCで取りこみ、補強した。休止、沈黙などでトランスクリプションでは出にくいものを視覚的データで補うことができた。

3-1 で見た同じ発話場면을映像で追ってみよう。



(写真③) “Guten Tag” と挨拶を交わす場面。接触場面でもっとも重要な第一印象を形成する場面である。主に、非言語コミュニケーションが機能しており、対話者のどちらが「話し始める」のかが決定される。視線も話し相手に合わせている。にこやかな表情である。相手と話をする用意があることを表情が強調していると考えられる。



(写真④) 内言に適切なドイツ語の表現を探している場面。ドイツ語母語話者が „erste?“ と尋ね、被験者2：“Ja, ja, hm.” と答えて(いいよども)いる。被験者2の左手(手振り)を見ると、すでに人差し指でおそろおそろ「1」が示されている。だが、手は写真⑤にくらべてまだ下のほうにあり、話し相手にはあまり訴えかけていない。



(写真⑤) 写真④に続くカット。人差し指で「1」を明確に示し、「1」、つまりドイツ語を「初めて」学習しているという情報を自発的に提供している。ドイツ語母語話者によって、das erste Jahr (最初の年) と言い換えられてはいるが、「1」が通じたことで、表情は明らかに変わっている。



(写真⑥) 写真⑤の発話単位の内容を受けて、ドイツ語母語話者が“Seit Oktober”「10月から(以来)ですか」と尋ねている。(11行目) この質問に対して、被験者2の表情がすぐに変ったことが見て取れる。つまり、この瞬間には被験者2はこの質問を了解していないか、時期を確認している最中であることが推測される。



(写真⑦) 19行目で、ドイツ語母語話者が“Deutsch ist schwer?”と17行目の情報確認を繰り返しているところである。これは、16行目で被験者2が自発的情報提供で持ち出したことの確認であるが、被験者2は依然として自分のことばを捜している。schwerを強調したくないために、相手の発言を否定する意図が手の動きを伴っていると考えられる。



(写真⑧) 22行目で被験者2が“a little”と「少し」を表現している。「やや難しい」程度の意味であろうが、英語の単語しか出てこなかったために、手振りで補っている。



(写真⑨) 42行目で被験者2 „Ah drei“ と答えているところ。「週3回」を伝えようとしている。言語メッセージの代理の機能を果たしている。この直後に、自発的情報提供があり、さらに2回の授業があり、合計5回の授業があることを伝えている。

この対話場面では、言語によるコミュニケーションと非言語コミュニケーションの両方が極めて適切に機能していることが観察される。身体動作学 (Kinesics)、準言語学 (Paralinguistics)、近接空間学 (Proxemics) に代表される非言語コミュニケーションが重なり合うように機能していると考えられる。非言語情報には、スタジオという実験室環境；声の出し方、表情音声、言いよどみ、ポーズ、沈黙；衣装、表情、身振り、手振りなどの空間、非言語的な音声、身体動作に関わる情報や時間、性別、地位、身分、役割に関する情報を含んでおり、言語情報に比較してその情報量はきわめて大きいと考えられる。言語の音調的要素もこれに含まれ、質問、回答、思考、肯定、否定、判断保留、判断回避などの態度が時間的な経過の中で言語情報を伴って示されている。この場面で伝達されている情報は以下の通り。

写真③笑顔 (どうぞよろしく)、④(どう言えばいいのだろう？ 1 なのだけど)、⑤(これでいいんだ。1 なんだ。)、⑥(ええ、どうだったかなあ)、⑦(ううーん、そうじゃないの) [否定]、⑧(ちょっと [むつかしいわ])、⑨「3 回よ。」

上記の対話場面では言語情報の代理、強調、否定の役割り³⁾を明確に果たしているのが確認できる。もちろん、対話の相手にその情報が正しく伝わっているかはもう一つの問題であるが、この場面では対話相手に誤解された箇所は観察されていない。

3) 非言語コミュニケーションについては、東山安子「日本人の非言語コミュニケーション」(1996)、橋本満弘、石井敏編『日本人のコミュニケーション』初版第3刷 (p.105-139) 参照

4 分析と考察

4-1 分析1 最初の対話が成立するまでを以下に記述している。(下線は筆者)

被験者1：着席してすぐに、上を向いたり、下を向いたりして、ドイツ語母語話者とはすぐには視線を合わせようとしない。スタジオを見まわして、ようやく7秒後に挨拶を交わす。それから26秒後にドイツ語母語話者の方から、最初の発話が行われる。(33秒語)

被験者2：すぐに自分の前のドイツ語母語話者と挨拶を交わし、スタジオを少し見まわした後、14秒後にドイツ語母語話者から、最初の発話が行われた。(14秒後)

被験者3：最初からドイツ語母語話者と視線を合わせ、自分の方から「日本語じゃべれますか」と最初の発話を始める。最初から発言権をとる。(0秒後)

被験者4：最初からドイツ語母語話者と視線を合わせ、ドイツ語母語話者がすぐに発話した。(0秒後)

被験者5：スタジオを少し見まわした後、5秒後にドイツ語母語話者と視線を合し、挨拶を交わしたが、その後はドイツ語母語話者とは視線を合わせずに、上に目をやったり周囲を観察しているが、表情からは「困ったなあ」という感情が示されている。その後、一瞬ドイツ語母語話者に視線が向かうがすぐそらし、口を横にぎゅっと結び、緊張した様子が続く。右を向き、左を向き、上を向き、またドイツ語母語話者の方に視線をやろうとしている。挨拶から41秒後にドイツ語母語話者から最初の発話が行われた。(41秒後)

被験者6：最初から恥かしがって「えへへー」と照れ笑いをし、ドイツ語母語話者と視線を合わせ、挨拶を交わす。下を向き、視線を左に向けるが頭はドイツ語母語話者の方にむけたまま、緊張をほぐすように胸を数回手でたたく。また、右を向き、左を向き、左下の方が気になるよう。視線も頭も左に向けて、肩を上げ下げし、一旦ドイツ語母語話者と視線を合わせ、下をを向く。上を向いて、また下を向く。ピンマイクが気になり(気になるという動作)、

ドイツ語母語話者と視線を合すと、このタイミングでドイツ語母語話者がすぐに発話を始めた。(36 秒後)

被験者7：まず椅子に座りなおしながら右手前方に視線をやるが、4 秒後に挨拶を交わす。すぐに、自分の名前を名乗る。すると、ドイツ語母語話者語も名前を名乗っている。(4 秒後)

被験者8：椅子に座った瞬間に音がしたので笑顔になり、すぐにドイツ語母語話者と視線を合わせ、挨拶する。その後、スタジオを観察し始め、日本語で「すごい」というが、頭を掻き、髪の毛を整え、24 秒後にドイツ語母語話者が最初の発話を始める。(24 秒後)

被験者9：椅子に座る瞬間に、ドイツ語母語話者と視線を合わせ、挨拶を交わす。実験者がスタジオを出て行くのに合わせて右向きになり、またすぐにドイツ語母語話者と視線を合わせ、左を向く。髪の毛をさわりながら右を向き、視線を一瞬ドイツ語母語話者にむけるが、どちらも発言権をとらない。ようやく 34 秒後にドイツ語母語話者が最初の発話を行う。(34 秒後)

被験者10：椅子に座るとドイツ語母語話者とちらちら視線を合すが、右を向いたあと、挨拶を交わし、下を向き、腕時計を見て、視線を合す。18 秒後に自分の方から発言権を取り、名前を名乗り、ドイツ語母語話者も名前を言っている。(18 秒後)

平均すると、20.4 秒後に最初の対話が始まっている。(挨拶だけで途切れた場合は、次の対話対が出てくるまでの時間)

4-2 分析2 事後アンケートから (下線は筆者)

項目1：見知らぬ「ドイツ人」と「2人で待っている」という状況に置かれました。その時、どのように思いましたか。に対して、被験者の回答を紹介しよう。

- 1 やや緊張しました
- 2 何か話したいと思いました。でもドイツ語で言いたいことがしゃべれないのでジェスチャーを使ってしゃべりました。

- 3 なんとかコミュニケーションをとらねば、と思いました。
- 4 これまで勉強してきたことがどれくらい使えるかをためすチャンスと思いました。周囲にあまり気にせず会話ができたのでよかったです。
- 5 何を話してよいか分からずとても困った。
- 6 「全く話せないし、聞き取れないのに、どうしよう…」と不安になり、緊張しすぎて目も合わせませんでした。
- 7 先生がシナリオをわざと忘れられたのかと思った。
- 8 何て話そうかなーって、すごく困りました。それと、スタジオなんてはじめてだからキョロキョロしてて、今思うと恥ずかしいです。
- 9 何か言わないと。
- 10 どのように話しかけていいか、何から話せばよいか、はじめはとまどいました。

スタジオという実験室環境で、撮影準備をしたあとの「待ち時間」での接触場面である。普段見慣れない機器などが設置されているスタジオは決して自然な環境ではない。また、何よりも、各学部で一学期「初級文法」の授業を受け、さらに言語教育研究センターのドイツ語インテンシヴ・コースで8～9週間程度「コミュニケーション・アプローチ」でドイツ語を学習したのが被験者である。その一年生が初対面のドイツ語母語話者と「居合わせる」ことになったのである。最初の実質的な発話単位が始まるまで、平均して約20秒間程度の空白があるが、これはむしろ個人差の方が大きいと言える。緊張もあるが、その割には対話が成り立っている例が多かった。ただし、自分のほうから話しかけていく例は3人と少なかった。しかし、ほとんどの被験者が、話す必要があることを意識している。

4-3 分析3 事後アンケートから（下線は筆者）

項目3：どのような方法でコミュニケーションしたらいいと思いましたか。

- 1 知っている言葉と身振り手振りで。
- 2 単語をしゃべってみる。ジェスチャーも重要だと思いました。

- 3 自分の知っている文章や単語を使ってみようと思ったけどあんまりうまく行かなかった。
- 4 今まで習ってきたことを使えばいいと思いました。結構、10分程度は話しがもちました。
- 5 とにかく話す
- 6 単語が分からなくて英語で答えてしまったり、分からずと「j a」[はい]と答えたりしていました。
- 7 ドイツ語の練習がもっと必要である。
- 8 とりえず顔をみて、何か話しかけることが大切だと思いました。
- 9 話したらいいと思ったけど、ドイツ語で何て言えばいいか分からなくて困った。
- 10 とにかく外国の人と話すこと（自分が英会話を学ぼうとした際そうしたから。高校時代のことですが…）

非言語コミュニケーションや経験ないし経験知の重要性に気付き始めている被験者が多いのが特徴である。

4-4 分析4 事後アンケートから（下線は筆者）

項目2：今日の体験から、自分の行動を振り返って自由に記述して下さい。（誤字脱字も記述通り）

- 1 いつでも受身で行動しています。
- 2 さいしょはどうしようかと思った。でも、話しかけてきてくれてそこからは話したいという思いがいっぱい出てきました。
- 3 もっと単語や文法の力のなさを思い知らされました。ドイツの学校に行くべく頑張りましょう。名前を聞いたのが遅かったです。反省。
- 4 最初はドキドキしました。シナリオ読むのが本当と思っていたので先生がなかなか戻ってこないから、徐々にこうなることに気付きはじめました。
- 5 最初は緊張して何を言ったらいいかわからなかった。もっと単語を覚えなけ

れば、と思った。

- 6 やりきれなくて、涙が出そうな思いでした。
- 7 緊張して疲れた。とにかく恥かしい。
- 8 なんだか、だまされた一つて感じです。メチャクチャはずかしい。ドッキリやもんー。でも、これが本当の自分なのかと思いました。
- 9 とにかく言葉をさがしてました。
- 10 ドイツ語インテンシヴクラスで学びはじめて3ヶ月ですが、自分の勉強不足を痛感しました。(特に語彙等)

学習者は自分の行動を振り返るとき、きわめて謙虚に評価していることがわかる。また、受身的な態度、単語や文法の力の欠如に原因を求める態度が顕著である。事後アンケートとインタビューから、被験者、ドイツ語母語話者、実験者の3者による、コミュニケーション事態に関する評価を下記の表2のようにまとめた。母語話者と実験者の評価はほぼ同じである。3者を比較すると、被験者3と9で評価が分かれる。母語話者と実験者が肯定的な評価をしているにもかかわらず、被験者は否定的な評価をしている。全般に、自分の行動を「割り引いて」評価する傾向があると思われる。

(表2)

Nr.	学部	性別	年齢	外国滞在	外国人との接触	被験者の感想	母語話者の感想	観察者の感想
1	法学部	男	19	ない	ない	否定的	否定的	否定的
2	社会学部	女	19	ある	ある	肯定的	肯定的	肯定的
3	法学部	女	19	ない	ない	やや否定的	肯定的	肯定的
4	文学部	男	20	ない	すくない	肯定的	肯定的	肯定的
5	経済学部	女	19	ない	ない	やや否定的	やや否定的	やや否定的
6	法学部	女	19	ない	ない	否定的	否定的	否定的
7	神学部	女	35	ある	すくない	やや否定的	否定的	否定的
8	文学部	女	20	ない	ない	否定的	やや否定的	やや否定的
9	文学部	女	19	ない	ない	やや否定的	やや肯定的	肯定的
10	経済学部	男	20	ある	すくない	肯定的	肯定的	肯定的

4-5 分析5 事後アンケートから

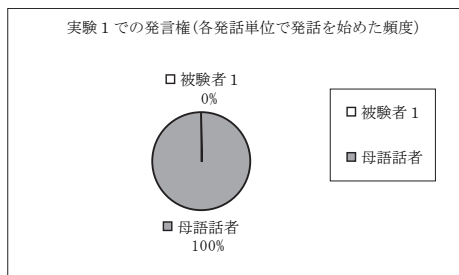
項目5：今日のワークショップの体験は、今後のドイツ語学習にどのように役立つと思いますか。

- 1 より多くの言葉を覚え、積極的に学ぼうと思いました。
- 2 ドイツ人としゃべれたのがとてもよかったです。後で教えてもらってかなりびっくりしたけど。すごく楽しかったです。これからもっとドイツ語がしゃべれるようになりたいと思いました。やっぱり少しでも多くの単語を知ってることって大切ですね。
- 3 会話をするというのは難しい。理解するのも、理解してもらうのも。でも、これからも恐がらずに外国人の人達と話していきたいと思います。そう思えるようになったから。これからのドイツ語学習にも役立つはずです。
- 4 これまで習ってきたことが実際に使えるものだとわかったのでこれからの勉強もより力を入れようと思います。
- 5 もっと気合を入れて勉強しなければと思わされたのでよかったです。
- 6 大変役立つと思います。皆むなしさを感じて、もっとコミュニケーションが自由に出来るようになりたいと感じていると思います。
- 7 ドイツ語での会話を生きたものとして捉えられるようになった。
- 8 もっともっと積極的に話していこうと強く強く思いました。がんばります。
- 9 知っていてもいざという時に会話でドイツ語を使えないことがよく分かりました。
- 10 役立つと思います。なぜなら私がそう自分で思うからです。ドイツ人の人とコミュニケーションを取れるようになりたいというふうにならかの形でドイツ語を勉強しようという刺激を受けました。

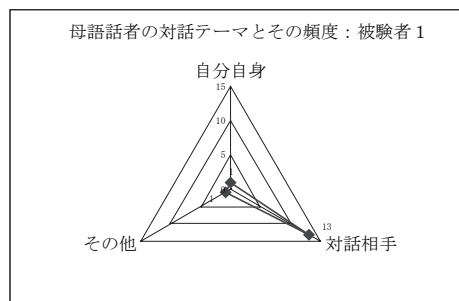
このワークショップに否定的な意見はあまり見られなかった。もちろん、驚きはあるが、ドイツ語学習の動機付けにもなったというのが大半の意見であった。

4-6 分析6 対話中のテーマのとりかた：

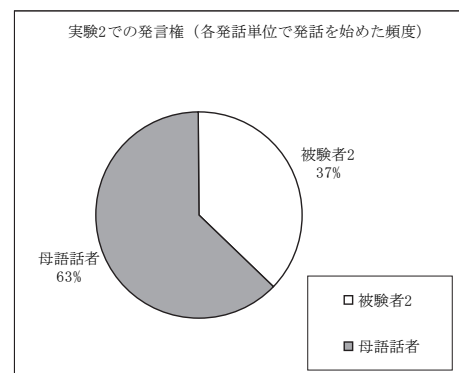
ここでは、10名の被験者から典型的な2例（被験者1と被験者2）を挙げて、対話中のテーマのとり方と発言権の取り方がどのように関連しているかを見る。被

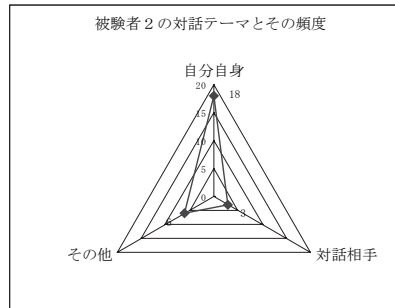
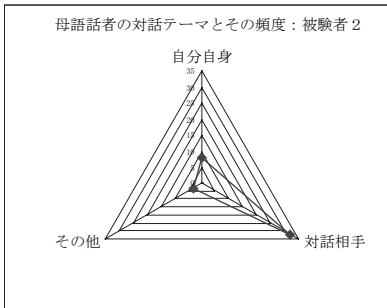


験者1の場合はドイツ語母語話者が発言権を100%取っている。つまり、そのドイツ語母語話者の発話に対する回答としてのみ被験者1の発話が成立しており、対話のテーマは完全にドイツ語母語話者に操作されている。テーマの内容は左記ダイアグラムの通りで、母語話者は対話相手である学習者に関することがそのほとんどであることがわかる。



被験者2の場合、発言権を取っている頻度に大きな差がある。つまり、被験者2はおよそ3回に1回(37%)は自ら発話単位での発話を始めている。母語話者の話題の取り方には差は見られないが、被験者2の発話内容をテーマによって分類すると、自分自身に関することが18回と最も多く、自分の関心に対話相手を引き込んでいることがわかる。つまり、自分の関心領域に引き込むことと発言権を取ることに関連があると推察される。





まとめにかえて

この「ワークショップ」は、日本人ドイツ語学習者の異文化接触場面での行動を分析するための実験室環境での実験的観察である。条件の統制を行い、特定の刺激を与える実験とは違い、観察が中心である。今回は、この「ワークショップ」で考察されたことから「ワークショップ」そのものの提示を中心にして、個々の記述と考察を行った。行動主義の影響の下に開発されたオーディオ・リンガル法の教材にはパターン認識が中心となるドリル練習が多く含まれている。このコースで採用されているコミュニカティヴ・アプローチではパターン認識をできるだけ避けることができるように、状況の認識から学習を始めさせて、言語材料の学習に入っている。このワークショップでも学習者は環境や状況についての情報収集から始め、その状況の中で初対面の母語話者との接触という所期の目的を意識しながら行動したと考えられる。学習者の学習における手続き的知識の重要性が、経験知という大きな文脈の中で再確認できたこともこの実験成果のひとつである。

参考文献

- Bausch, Karl-Richard/Christ, Herbert/Krumm, Hans-Jürgen (Hrsg.) (1995):
Handbuch Fremdsprachenunterricht. 3. Aufl. Tübingen: Francke.
- Bausch, Karl-Richard/Christ, Herbert/Königs, Frank G./Krumm, Hans-Jürgen
(Hrsg.) (2000): *Interaktion im Kontext des Lehrens und Lernens fremder
Sprachen*. Arbeitspapiere der 20. Frühjahrskonferenz zur Erforschung des
Fremdsprachenunterrichts. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Herrmann, Theo/Grabowski, Joachim (1994): *Sprechen. Psychologie der
Sprachproduktion*. Heidelberg: Spektrum Akademischer Verlag.